

【論文】

都市下位文化理論の再検討

——エスノグラフィーによる検証に向かって——

田村 公人*

本稿では、フィッシャーの調査研究（1982）が、彼自身の提唱する「下位文化理論」（Fischer 1975）の何を検証し、何を検証していないのかについて論証していく。フィッシャーの下位文化理論は「命題1：場所が都市であればあるほど、下位文化の多様性は増大する（The more urban a place, the greater its subcultural variety）」、「命題2：場所が都市であればあるほど、下位文化はより強化される（The more urban a place, the more intense its subcultures）」、「命題3：場所が都市であればあるほど、伝播の源泉が増大し下位文化への伝播が増大する（The more urban a place, the more numerous the sources of diffusion and the greater the diffusion into a subculture）」、「命題4：場所が都市であればあるほど、非通念性の発生率はより高まる（The more urban a place, the higher the rates of unconventionality）」という4つの基本命題で構成されているが、彼のネットワーク分析に基づく調査研究は「命題1」を除く、3つの基本命題の検証には成功していない。本稿では「命題2」、「命題3」、「命題4」は、ネットワーク分析ではなく、エスノグラフィーによる検証が必要となることを主張する。

キーワード：フィッシャーの下位文化理論、ネットワーク分析、エスノグラフィー

1 はじめに

本稿では、シカゴ学派都市社会学の新たな方向性を示したクロード・S・フィッシャーの「アーバニズムの下位文化理論」（Fischer 1975, 1976, 1982, 1984, 1995）の検証において、エスノグラフィックな調査研究が必要となる点を主張する。従来、下位文化理論の検証を目指す日本の都市社会学の研究の多くは、主としてフィッシャーの調査研究報告（Fischer 1982）を範とする量的なパーソナル・ネットワーク分析に関心を集中させてきた。しかし、1975年の論文で最初に定式化された下位文化理論（Fischer 1975）に照らして考えるならば、フィッシャーによって提起された仮説命題の中には、ネットワーク分析に基づく検証が困難と考えられるものがある。そこで本稿では、フィッシャーによって呈示された定義や概念、ならびに仮説命題や調査研究を検討しつつ、初期シカゴ学派において典型的に見出される、エスノグラフィックな調査に基づく都市下位文化の検証の可能性を開きたい。

* 本学現代教養学部非常勤講師

2 都市の「非通念性」を説明する理論？

2.1 下位文化理論

最初に下位文化理論の趣旨から確認していくと、1975年に「アーバニズムの下位文化理論に向かって」という論文において定式化された下位文化理論全体としての焦点は、村落と比較して不釣り合いなほど都市において「非通念的 (unconventional)」な意識や行動が見出されるという事実の説明方法の改良にある (Fischer 1975: 1319)。従来、ワースのアーバニズム理論においては、局所的な人口集中 (=都市化) に伴う「逸脱」行動の蔓延は、村落において典型的に見出される共同体の秩序が弛緩した結果と解釈されてきた。秩序の弛緩が個人を孤独に陥れると共に、ある種の自由を与えることで、風変わりな行動から犯罪的な行動に至るまでの「逸脱」行動に傾斜させてきたという趣旨の説である (Wirth 1938)。

この説に対してフィッシャーは、従来「逸脱」として認められてきた一群の意識や行動には、退廃と革新という両義的な性格 (Cohen 1968) が認められるとしつつ、都市化に伴う局所的な人口の集中は、下位文化の多様性を増大させ、下位文化の強度を増大させ、下位文化間の普及を促進させている。これら3つの過程が都市における「非通念性 (=逸脱という術語の価値中立的言いかえ)」を説明するという別の解釈モデルを示す。ここでの焦点は秩序の弛緩や「都会人の孤独」という説明図式に依拠せず、「逸脱」の発生率の高さをいかに論証するかという点にある。

この論証に際して、フィッシャーは基礎概念である都市を人口の集中 (=特に人口の規模) と定義し、また下位文化を「より大きな社会体系 (social system) と文化の内部に存在している、相対的に独自の社会の下位体系 (個人間のネットワークと制度のセット) と結びついた様式的な信念や価値、規範や慣習のセット」 (Fischer 1975: 1323) と定義している。後の議論を正確に進めていくために、下位文化理論の内容について整理しておこう。

まずフィッシャーは、都市が村落と比較して複雑に「構造的に分化」しているという事実は、既に都市において多様な下位文化が生まれている事実の証明であると主張する。構造的に分化した下位体系には、それぞれ下位文化が付着しているからである。また、都市は村落と比較して後背地から移民を吸引してきたという事実も、都市における下位文化の多様性の増大を証明している。移民はそれぞれ独自の文化を都市に持ち込み、都市の下位文化の多様性の増大に貢献しているからである。この2つの理由で「命題1：場所が都市であればあるほど、下位文化の多様性は増大する (The more urban a place, the greater its subcultural variety)」は証明されたことになる。

次にフィッシャーは、都市が村落と比較して下位文化の発達に有利になる条件として2つの根拠をあげる。ひとつは「臨界量 (critical mass)」という概念に基づく、下位文化に参集する人びとの規模の拡大の持つ効果である。下位文化に参集する人びとが「臨界量」に達すれば制度 (=服装のスタイル、新聞、結社…) の成立を可能とし、また制度は新たに下位文化に参集する人びとのメディアとして機能することで、下位文化の強度 (intensity) はさらに増していく。都市は村落と比較して人口が集中している点で、新たな下位文化の参集者を獲得しやすい。数が下位文化の強度を増すのである。今ひとつの根拠は、下位文化同士の接触である。都市において下位文化の数と種類が増し、またその規模が大きくなるほど、各下位文化の内部で共有されている価値や規範の相違を理由として、下位文化同士の「衝突 (culture clash)」が増える。この種の

衝突は各下位文化内部の凝集性を高め、下位文化の強化に貢献する。この2つの理由で、「命題2：場所が都市であればあるほど、下位文化はより強化される（The more urban a place, the more intense its subcultures）」は証明されたことになる。

さらにフィッシャーは、下位文化同士の接触の別の側面に注目する。都市における多様な下位文化の存在は、互いに影響を及ぼし合うことを可能とする。下位文化の存在それ自体が「伝播」の源泉になるというわけだ。確かにこの説明は、下位文化同士の「衝突」とは形式的に矛盾している。しかし、下位文化同士の接触は衝突と伝播を繰り返すことを通じ、異種混合的な新しい下位文化の生成を可能とする。この理由で、「命題3：場所が都市であればあるほど、伝播の源泉が増大し下位文化への伝播が増大する（The more urban a place, the more numerous the sources of diffusion and the greater the diffusion into a subculture）」は証明されたことになる。

最後にフィッシャーは、上記3つの命題から導き出された根拠をベースに、都市における「非通念性」の発生率の高さを導く。まず、多様かつ独自の下位文化の数が増えれば、その分だけ一般的な規範から逸脱した行動は数が増える。次に、都市は村落と比較して「臨界量」に達しやすいという点で、村落では孤独を余儀なくされる「逸脱者」が自らと類似した「仲間」を見つけ、独自の下位文化を発達させることが可能となる。さらに、都市は村落と比較して「伝播」の源泉が多く、周辺（periphery）から主流文化（the mainstream culture）に影響を及ぼす可能性が高まり、都市全体の「非通念性」への寛容性が高くなる。この3つの理由で「命題4：場所が都市であればあるほど、非通念性の発生率はより高まる（The more urban a place, the higher the rates of unconventionality）」は証明されたことになる。以上が、下位文化理論の基本命題として示された4つの命題の説明内容の簡単な要約である（Fischer 1975: 1323-30）。

確かに、上記の4つの命題の各説明には「都会人の孤独」から「逸脱」が生まれるという説明はどこにも見出されない。少なくともワースとは違った形で、しかも論理整合性が図られつつ都市において「非通念性」の発生率が高まる理由を論証している。では、フィッシャーはこの理論をベースとして、どのような調査研究を行っていたのであろうか。次では、フィッシャー自身の調査研究を簡単に概観しておきたい。

2.2 調査研究の簡単な概略

1982年に『友人のあいだで暮らす（To Dwell among Friends）』というタイトルで出版されたフィッシャーの調査研究における最大の焦点は、都市化は個人の親密な絆（Wellman 1979）を破壊するというワース流の「コミュニティ喪失テーゼ」の反証にある（Fischer 1982: 22-5）。ともすればこの焦点の合わせ方は、75年の下位文化理論とまったく別ものの研究を予感させる。しかしフィッシャーにおける下位文化理論の趣旨が、都市に暮らす人びとは親密な絆を通じて「逸脱」を育てているというモデルの呈示であったと考えれば、フィッシャーが一貫して「コミュニティ喪失テーゼ」の反証を意図して75年の下位文化理論を提起していたとしても、異同はない。

この「コミュニティ喪失テーゼ」の反証という点に関連していえば、フィッシャーは『都市の村人たち』（Gans 1962）と評したガンを典型とする「コミュニティ存続」論者のように、都市に暮らす人びとが村落に暮らす人びとと同様に、親族や隣人との深い関与を続けているとまでは予測しない。都市に暮らす人びとは村落に暮らす人びとと比較して人口規模が大きい定住地に

暮らすという点で、日常的かつ対面的に親密な絆を育む相手の選択性が高まる。従って、非選択的な相手である親族や隣人との関係は後景に退き、かわって選択的な相手である友人との関係が活性化していくと予測する。衰退論者が親密な絆の破壊という解釈に終始してきたのは、専ら彼らが親族や隣人（＝近隣）との関係に関心を集中させたためであり、また存続論者においては都市において友人関係が活性化しているという実態を見過ぎてしているというわけだ。

そしてフィッシャーは、「コミュニティの内部及びその近傍に暮らす人びとの数（number of people living in and near a community）」として「都市度（urbanism）」（松本 1992）という基本概念を定義しつつ（Fischer 1982=2002: 44）、都市度が高くなるほど親密な絆を育む相手の選択性を高め、友人関係を活性化させるという仮説を検証すべく、アメリカ北カリフォルニア地方において 1,050 人（回答率 75.8%）を対象とする大規模な面接調査を 16 人の調査員を使って実施する。特筆すべきは、①（＝カリフォルニア）地方中核部、②大都市圏、③町、④準村落、日本の一般的な用法に置き換えていえば、①大都市、②大都市郊外、③地方都市、④町あるいは村に暮らす人びとそれぞれを均等に調査対象とした点であり、かつ調査内容も対象者個人の親族や隣人や友人関係に加え、仕事仲間や趣味のサークル・宗教等の自発的組織成員との関係をも体系的に検討した点である（以下では、表現を容易とするために、日本の用法に置き換えて議論を進めていく）。都市度の異なる地域に暮らす人びとの比較を通じて、専ら都市度の高い地域（＝大都市）に暮らす人びとを対象とするような調査では得がたい、確たる証拠を得るというねらいがうかがえる。

全体として考えれば、フィッシャーの調査研究からは都市度の高さが親密な絆を破壊するという衰退論者の主張を支持する証拠は確認されない。一方でパーソナル・ネットワークの選択性仮説の検証にとって核となる項目である親族関係、隣人関係、友人関係に関していえば、親族関係については都市度が高くなるに従い、いわゆる親戚との関係が他の関係に置きかわる傾向が見られる点で選択性仮説が支持される一方、隣人関係と友人関係については都市度以外の要因（住民の社会構成、あるいは年齢や学歴やジェンダー、所得や婚姻の有無といった個人の属性）が関係の選択性を高めている（あるいは高めていない）可能性が考えられるなど、選択性仮説を完全に支持するまでの証拠は提出されていないものの、調査結果はゆるやかに選択性仮説を支持している。

いずれにせよ、フィッシャーの調査研究は都市度の異なる地域に暮らす人びとのパーソナル・ネットワークを体系的に比較検証した点に加え、親族や隣人のみならず友人関係に注目する理論的意義を明確に示した点で都市コミュニティ研究の、もしくは都市ネットワーク研究の新たな可能性を開いた画期的業績である。しかし本稿にとって焦点となるのは、パーソナル・ネットワーク研究としての意義を確認するというよりも、むしろフィッシャーの調査研究が果たして下位文化理論の何を検証し、何を検証しえていないかを正確に把握することである。

3 検証しているのか…

3.1 親密な社会圏

まず、理論の焦点となる下位文化という術語の検討から始めたい。フィッシャーの 75 年における下位文化の定義はパーソンズ流のシステム論の影響が色濃く、極めて抽象的なものであった。

この種の定義づけでは下位文化とは具体的に何を指すのか、それを明確に説明することは難しく、当のフィッシャーもまた82年の研究報告において、「下位文化とは何であろうか。これは定義するよりも認識するほうが簡単である」(Fischer 1982=2002: 281)と下位文化の定義づけに苦戦を強いられていることを認めている。

しかし2節で概観した通り、親密な絆を育む相手が親族や隣人から友人にかわるというフィッシャーの選択性仮説を踏まえるならば、友人と出会い、関係を築くのがたとえば仕事先になるのか、あるいは趣味のサークルになるのか、さらには別の機会なのか、一概には特定しがたいという点は勘案する必要がある。換言すれば、定義の焦点はいわゆる血縁と地縁以外の縁(=仕事、趣味…)に基づくパーソナル・ネットワークとネットワークを媒介する制度(=職場、サークル、集会場、店…)すべてを指すという点であり、コミュニティ衰退論者や存続論者、その双方とも親族や隣人との関係をメインに関心を寄せてきたとするならば、ある意味サブとして軽視されてきた友人との関係を随所に観察できる親密な社会的世界、もしくは親密な社会圏を下位文化という術語で定義することは、常識的理解への挑戦というフィッシャーの理論的スタンス(松本1996)をよく表していよう。

仮に、下位文化を友人関係が顕著に観察できる社会圏、あるいは社会的世界と解釈した場合、パーソナル・ネットワークの選択性仮説が下位文化理論の命題と論理的に結びつくのは、「命題1: 都市であるほど下位文化の多様性が増大する」の「構造的分化」仮説である。都市度が高くなるほど、より友人関係が活性化し選択的に構築されているという事実は、都市において構造分化が進み、その下位体系に付着した下位文化が生まれているという事実と同義である。そして調査結果は、実際に友人関係の選択性をゆるやかにではあるが支持している。多様な下位文化は生成されているのである(少なくとも、理論的意味では)。

ともすれば、75年におけるシステム論的な「構造的分化」モデルでは、個人は受け身的な大衆として、都市それぞれの単位(=地域・学校・職場…)に機械的に張り付けられているといったイメージが拭えない。これに対してフィッシャーは個人の選択能力(=もちろん、この選択は完全に自由なものとはいえない。年齢や学歴やジェンダー、人種や職業等によって個人の選択可能な相手の範囲は制約されている(Fischer 1982=2002: 20-5))に注目し、どの程度個人が制約の範囲内で相手を選択し、自らの望む最良の人間関係を構築しているかについて検証している。たとえ検証によって導き出される結果が、マクロな視点で見ればシステム論的な構造的分化と同じものであったとしても、オートノミーと見做すシステム論者と一線を画し、個人を分析対象とする調査研究をデザインした上で実際に検証しているという意義は、決して過少に評価されるべきではない。

3.2 縮小化された下位文化理論

しかし、個人が最良の人間関係を構築していく上で、等しく自らと類似した他者を選別する(=ネットワークの同質性を高める)という仮説を設定していたことが、結果として下位文化理論の部分的修正に追い込まれていくという点は、さらに検討に付されるべき問題を提起する。果たして、類似した他者とは誰か？仮に趣味的な一致で結びついた友人関係であるとして、一方が豪華な持ち家に暮らし、一方が取り壊し寸前の安アパートに暮らしていたとした場合、両者の結びつ

きは「同種交配的（＝同類結合）」といえるのか？類似と相違が混在する相手と親密な絆を育む可能性を勘案しない、フィッシャーの設定する極めて単純な「同類結合」仮説は、記述分析のレベルではより精査な検証が求められるべき仮説といえる（大谷 1995, 2007）。

一方で理論的なレベルにおいて、都市度の高さが個人のネットワークの選択性を高めていく効果として、フィッシャーが「同類結合」以外の可能性を意図的に排除している点は、勘案する必要がある。これはフィッシャーが、都市度が高くなるに従い異質な他者との一時的・表面的な接触が蔓延することで親密な絆が破壊されるとする、ワースの「コミュニティ衰退テーゼ」の反証を意図しているからに他ならない。つまり、都市度の高さが個人の親密な絆のネットワークの異質性を高め、結果として都市における「非通念性」を増大させるとしたのでは、ワースの説明と同じ展開となり、説明方法を改良したことにはならないわけである。

但し、ネットワークの同質性には親密な絆が付着し、一方でネットワークの異質性には親密な絆が付着しないというロジックでは、ネットワークの異質性に親密な絆が付着するケースを捉えることが難しい。そして、個人の「同種交配的」な友人関係の集合が、システム論における「構造的分化」の各单位と一致すると想定していたフィッシャーにとって、パーソナル・ネットワークの選択性が高くなるほど高いと見込まれる大都市に暮らす人びとの中に、「異種交配的」な友人関係を構築する人びとが看過しえないほど含まれていたという自身の調査結果は、ネットワークの同質性－異質性と親密な絆の有無をいかに論理的に結びつけるかという新たな問題を浮上させる。

フィッシャーはこの結果を受け、82年の研究報告の中で75年の下位文化理論の改定版を示している。具体的には①選択的移住（Selective migration）と②臨界量（Critical mass）と③集团的摩擦（Intergroup friction・75年の命題2「衝突」の言い換え）、以上である。仮説命題1の「構造的分化」と、仮説命題3の「伝播」、仮説命題4の「非通念性」のカットという大幅な縮小化が図られたことが見て取れよう（Fischer 1982=2002: 283-4）。

フィッシャーは「アーバニズム（＝都市度）が体系的に社会的分化と凝離（segregation）を生み出すと論じる一般モデルとの一致を困難とする」、「アーバニズムは誰に対しても同類結合（homophily）を増大させると論じる単純な下位文化モデルとの適合をも困難とする」、「それは基本的な下位文化の論証の修正を示唆している」（Fischer 1982 = 2002: 276）と書き連ねつつ、「同類結合」仮説の修正が必要となる理由についてのみ、次のように説明している。

まず、社会の大多数を占める人びとにとって、都市度は自らと類似した他者を選択し親交を深めることに影響を及ぼさない。大都市であろうと村であろうと、「まわりじゅうにいる」からである。むしろ、都市度は多数派にとって、異なる他者と出会う可能性を広げる効果を持ち、「異質的（heterogeneous）」（＝完全に異質とまではフィッシャーが認めていない点には注意。筆者注）な他者との間で親交を深めることにも影響を及ぼす。

逆に、社会の少数派の人びとにとって、都市度は自らと類似した他者を選択し親交を深めるのに重大な影響を及ぼす。基本的に少数派は、大都市であろうと村であろうと「まわりにはさほどいない」。しかし、大都市は村と比較して「臨界量」に達しやすいという点で、村落では「孤独」を余儀なくされる少数派に対して、自らと類似した「仲間」を見つける可能性を与える（Fischer 1982=2002: 276）。

一方で、フィッシャーは「下位体系には下位文化が付着する」という「構造的分化」仮説が調査結果と食い違っている理由、ならびに「基本的な下位文化論の修正」の理由については、具体的に説明していない。確かに、システム論の想定する構造的単位（＝地域・学校・職場…）を越えた親密な絆、つまり異質な他者との間に親密な絆が形成されているという調査結果は、ネットワークの異質性は親密な絆を破壊するというワース説を反証していると共に、ネットワークの同質性が親密な絆を育む（＝下位体系には下位文化が付着する）という説もまた成立困難なものとしている。果たして、システム論とは別の友人関係の社会構造（＝下位文化独自の社会構造）とでもいべきものが形成されているのか？あるいは都市度の高い地域に暮らすゆえに機会が増える偶然の出会いが、専ら断片化された（＝構造に統合されていない）親密な友人関係の形成に寄与しているのか？少なくとも、フィッシャーには「構造的分化」にかわる、都市度の高さが多様な下位文化を生み出す過程の説明ロジックがない。また、縮小化された下位文化理論が、都市における「非通念性」を説明可能なのかという点についても、今のところ定かではない。

4 検証したといえるのか…

4.1 下位文化も検証していた

本節では、「命題2」から「命題4」までの検証について検討していく¹⁾。但し、ここからの検討が従来の日本の都市社会学の文脈においてさほど言及されることのない、フィッシャーの調査研究の別の側面に注目している点については、簡単に説明しておく必要があるだろう。

従来、日本の都市社会学の教科書や研究論文において、フィッシャーの下位文化理論の紹介や理論的整備（＝82年の調査研究は、既に下位文化理論の弱点をさらけ出しつつある）を図る論考は、75年の下位文化理論の仮説命題と82年の調査研究のネットワーク分析をセットにして論じる傾向が見られる反面、下位文化理論の提唱者が字義通りの意味での下位文化を検証していた点については、踏み込んだ紹介も理論的整備も手控えられてきた傾向にある（松本 1992, 1996, 2002a, 2002b, 2008; 大谷 1995, 2007）。従って下位文化理論とは、直接には下位文化の研究とは結びつかない、都市のパーソナル・ネットワーク理論としてのイメージが定着してきたとしても、従来の紹介や理論的整備の現状を勘案するならば、過言ではあるまい。

確かに、フィッシャーが研究報告においてネットワーク分析の報告に費やしたページ数と比較すれば、下位文化の報告に費やしたページは不釣り合いなほどに少ない。また、調査研究で主として何を検証していたのかと問われれば個人のパーソナル・ネットワークであり、また理論的争点もネットワークの選択性であって、下位文化や「非通念性」については調査研究全体の中で後景に退いている感は拭えない。従って、フィッシャーの調査研究を概略として記述するともなれば、パーソナル・ネットワークの選択性仮説に基づいたネットワーク分析と、その分析結果は仮説を支持していたのか否かという問題が中心となり、フィッシャーがいかなる方法で下位文化を検証し、その結果が仮説を支持していたのか否かという点については、割愛となっても致し方がない。しかし本稿において焦点としている、フィッシャーの調査研究が果たして下位文化理論の何を検証し、何を検証しえていないかという問題との関連で考えるならば、フィッシャーが下位文化をも自らの調査研究において検証していたという事実を等閑視するわけにはいかない。

4.2 臨界量

理論の「命題2」における「臨界量」仮説は、都市度が高くなるほど下位文化の制度（＝服装のスタイル、新聞、結社…）の成立を可能とし、また制度は新たに下位文化に参集する人びとのメディアとして機能することで制度を発達させる、つまりは下位文化の強度（intensity）が増していくというものであった。この仮説の検証に際して、フィッシャーは北カリフォルニア地方において「専門化された機関（subcultural institutions・制度の言い換え）」が①大都市、②大都市郊外、③地方都市、④町あるいは村において、いかに分布しているのかという点に注目する。そして、〈1〉アウトドア・スポーツ店、〈2〉ミュージック店（Music Stores）、〈3〉劇場、〈4〉チカノ系店舗（Chicano Stores）、〈5〉釣りや狩猟クラブ、〈6〉中国系組織を取り上げ、各機関の地域別分布を電話帳の分析を通じて検証している。その結果は、エスニックな機関（〈4〉、〈6〉）は都市度の違いというよりも、むしろ各地域に暮らすエスニック人口の分布によって機関の分布に違いが見出されるというものであり、それ以外の4つの機関に関しては都市度が高くなるに従い、機関が増加する傾向が見出された。

但しここで区別して考えるべきは、各地域の人口比率に比例して機関が増加するケース（〈1〉、〈2〉、〈5〉）と大都市に際立った分布の偏りが見られるケース（〈3〉）である。フィッシャーによって示された図表に従っていえば、たとえば①町や村におけるミュージック店と劇場の数の平均はそれぞれ2.5対1である。そして、②地方都市においては11対1.5、③大都市郊外においては22対3.1と数の差は拡大していくものの、④大都市においては39対27と一気にその差は縮まっている。この結果からは、ミュージック店は各地域にとって「ありふれた」下位文化の機関であるのに対して、劇場は大都市以外では「もの珍しい」下位文化の機関である事実を示している。つまり、劇場はミュージック店と比較して、より都市度の効果が強く表れているというわけだ（Fischer 1982=2002: 284-8）。

少なくとも、フィッシャーは75年の「命題4」における、都市の「非通念性」の発生率の高さの根拠のひとつとして、村落では孤独を余儀なくされる「逸脱者」が都市では自らと類似した「仲間」を見つけ、独自の下位文化を発達させることが可能になると説明していた。この文脈で考えれば、劇場の分布はまさにこのフィッシャーの説明の妥当性を証明しているかに見えるし、フィッシャー自身も「臨界量の考えを支持する若干の証拠を手になっている」（Fischer 1982=2002: 335）と主張している。しかし本稿は、このフィッシャーの主張を無批判に受け入れることはできない。劇場が局所的に大都市に集中するのは、都市度の効果以外の別の要因が多分に関係している。

アメリカとの文脈の違いは十分に吟味されなければならないとして、大都市への劇場の偏った分布は日本においても確認される（佐藤 1999）。とりわけ、「小劇場」と評される商業性の低い劇場は、大都市への偏りが際立つ。佐藤と佐々木は小劇場で活動をし、一定の成功をおさめた劇団のフィールドワークを通じて、小劇場が専ら東京に集中する理由として①試行錯誤の機会の提供、②収入の途、③副業の確保、④文化的ゲートキーパーの存在、⑤活躍の場、⑥人材のプール、以上をあげている（佐藤・佐々木 1996）。この中で「臨界量」仮説の妥当性を示すのは、⑤活躍の場を東京が提供するという点で指摘されている「観客マーケット」の存在だが、少なくとも

佐藤と佐々木はこの要因だけを持ってして、東京に小劇場が集中する理由とはしておらず、果たして都市度の効果として「観客マーケット」の存在が解釈可能であるかどうかはわからない。

ここであえて、佐藤らのエスノグラフィーを議論の俎上にのせたのは、フィッシャーがパーソナル・ネットワーク分析に関しては、一貫して都市度以外の要因、佐藤らの研究に依拠している①、②、③、④、⑥の要因を勘案しつつ、統計的に調整を図りながら都市度の効果を検出していたのに対して、「臨界量」仮説の検証に関しては大都市に劇場が偏って分布する「他の理由」を勘案することなく、都市度の効果として認めているからに他ならない。なぜフィッシャーは、ネットワーク分析と同様の注意深さで「臨界量」仮説の検証を図らなかったのであろうか？なぜ、1,050人の調査データを離れ、電話帳のデータ分析から結論を急いだのであろうか？少なくとも、都市度の異なる地域に暮らす個人のパーソナル・ネットワーク分析のためにデザインされた量的データでは、「臨界量」仮説の検証に支障が生じていた可能性は濃厚である。

4.3 集団的摩擦

さらに「臨界量」仮説と並び、75年の「命題2」で呈示されていた「衝突」仮説（＝82年の集団的摩擦の言い換え）の検証についていえば、「定住地のもっとも良いところと悪いところ」、そして「隣人、都市住民全般への不信感」に対する1,050人の調査対象者への意識調査の結果から、大都市ほど他の住民一般に対する不信感が増す傾向にあるという若干の証拠が示されているに過ぎず、下位文化同士の衝突が内集団の凝集性を高めているか否かという問題に直接対応する調査データからの裏付けは図られていない。あたかも、何がしかの対立が見出されれば、それが下位文化の強化を傍証するというロジックは、データを離れた推論にフィッシャーを向かわせ、その典型的な例は下記に示すもので十分であろう。

都市における対立の多くは中立的かつ普遍的な話題というよりも、むしろ彼らの下位文化それ自体——生活様式、組織、そして権利——をめぐるものである。この最後の点は私の読んだ1977年の終わり近くから1978年初めの北カリフォルニアのいくつかの新聞から引き出されている。（Fischer 1982=2002: 346）

下位文化同士の衝突が内集団の凝集性を高め、下位文化を強化していくという仮説を綿密に検証していくためには、まず、個人が集団にコミットメントしていく「深さ」が問われなければならない。それは、ある下位文化に参集する人びとが日頃どのような人びとと付き合い、けんかし、仲間を見つけ、あるいは裏切られる中で、いかに自らの所属する集団に対するコミットメントを深めていくのか、あるいはいかないのか、その時系列的変化を何らかの下位文化に密着し詳細に追跡しない限り、解き明かせる問題ではあるまい。そしてネットワーク分析が、「一時点におけるパーソナルネットワークを捉えることはできても、時系列的な変化を捉えることができず、社会の変化や、個人の生活史・ライフコースに対応するパーソナルネットワークの変容過程を明らかにしえない」（森岡 2002: 5）という弱点を持つ以上、集団へのコミットメントが徐々に深くなっていく（あるいはいかない）プロセスの検証にネットワーク分析が適しているとは、少なくとも現段階では考えにくい。

4.4 「非通念性」の部分的証明

フィッシャーの調査研究において75年の「命題3」の「伝播」仮説の検証は、「命題4」における都市の「非通念性」の発生率の高さの根拠のひとつとして説明されていた、都市は村落と比較して「伝播」の源泉が多く、周辺から主流に影響を及ぼす可能性が高まり、都市全体の「非通念性」への寛容性が高くなるという説の検証と一体となっており行われている。この「寛容性」仮説の検証において、フィッシャーは①婚前の性交渉、②妊娠中絶、③マリファナの合法化、④教師としての同性愛者、以上の是非について1,050人の意識調査(Fischer 1982=2002: 106-20)から、総じて大都市に暮らす人びとほどこの種の「非伝統主義」な項目に対して寛容性が高いという結果を報告している。ここで上記4つが都市における「非通念性」を検証する質問項目としてフィッシャーが適合的と判断した理由は、アメリカの時代状況にあって放縦ではなく「進歩的」な態度の要素にふれているとフィッシャー自身が解釈した点にある。4つの項目は「非通念性」というべき退廃と革新、その両義的な性格を兼ね備えているというわけだ。

確かにフィッシャーの調査結果は、都市度が高くなるほど「非通念性」が高まるという「命題4」の説明を支持しているかに見える。しかし、この結果はいかなる根拠を持って説明されるというのであろうか？少なくとも、フィッシャーは「命題2」の「臨界量」仮説の検証において自らの1,050人の調査データとは別の、簡単な電話帳分析から得られたデータに基づき、「他の要因」の調整を図ることなく、都市度は下位文化を強化していると結論を急いだ。また「集团的摩擦=衝突」仮説の検証においては、専ら他の住民一般に対する不信感だけを焦点に検証を進め、各下位文化内部での凝集性が高まるプロセスについては何も検証していない。仮に不信感が検証されれば、それはすなわち各下位文化内部での凝集性の高まりを検証していることと同義であるといった、事後的な説明(post-hoc explanation)を無批判に受け入れることはできない。都市全体における不信感が強まるということは、同時に下位文化内部においても成員相互の不信感を強め、下位文化の凝集性を強めるのとは逆に弱体化させ、個人が孤独に陥るというロジックも成立するからだ(Wirth 1938)。端的に言えばフィッシャーの「寛容性」仮説の検討は、都市において「非通念性」が育まれるプロセスに関する十分な証拠を欠くという問題を抱えている。

この点に関連して、フィッシャーが都市住民における「非通念性」に対する寛容性の高さを説明するために、「意見の風土(climate-of-opinion)」(Fischer 1975: 1329)というロジックに依拠している点は注意する必要がある。このロジックは、都市は全体としてリベラルな雰囲気があるというものであり、都市において「非通念性」に対する寛容性が高いのは、都市の持つリベラルな「意見の風土」に依るとするものである。換言すれば都市住民がリベラルであるのは、都市がリベラルであるからだ。

少なくとも、「意見の風土」はダイレクトに「命題1」の「構造的分化」仮説から「命題4」の都市の「非通念性」へ、言い換えれば個人のパーソナル・ネットワークの選択性仮説から、都市のリベラリズムを結論付けることを可能とする。都市度が個人のパーソナル・ネットワークの選択性を高めれば伝統的な、すなわち反リベラルな親族や近隣との関係は背景に退き、かわって個人の選択意志に基づくリベラルな友人関係が生まれ、それはリベラルな「意見の風土」の醸成に貢献している。しかしこの「意見の風土」が、どこまで経験的に妥当なものであるのかについて

ては、現段階では判断できない。そして、この種のロジックへの依拠と引きかえに「臨界量」と「衝突」の双方の検証の重要性を、フィッシャー自らの手で閉ざしている感は拭えない。

5 都市エスノグラフィーの調査仮説として

これまで検討してきたように、フィッシャーの調査研究は「命題1」を別とすれば、十分に検証が図られているとはいいがたく、特に「命題2」の検証においては致命的な弱点を抱えている。しかし、その際論じたように「臨界量」の検証については、都市度の効果が際立って現れる下位文化を対象とした個別のエスノグラフィックな調査を通じて、「他の要因」を勘案しながら都市度の効果を検出するという作業を行うことで、弱点は補えるはずである。同時にフィッシャーの提起する「臨界量」仮説が、ただ闇雲に調査対象を選択するのではなく、大都市に偏って分布する傾向を持つ下位文化を対象とすることの理論的意義を伝えている点は、強調されていいだろう。

都市において見出される下位文化を何でも調べれば、都市を研究したことになるというのは、過ぎ去った初期シカゴ学派のエスノグラフィーの話である。都市度を独立変数とするエスノグラフィックな調査研究を始めるには、調査対象を戦略的に選ぶということ、中でも制度の地域別分布の把握がそのカギになるという点は、あらためて考えていかなければならない大きな問題を提起しよう。同時に、フィッシャーが82年の縮小化された下位文化理論で描いた3つのプロセスが、実はネットワーク分析では検証しえないプロセスの呈示であったと考えれば、何を検証課題としてフィールドワークを進めていくべきか、その指針は既に描かれているはずである。

[注]

- 1) 「構造的分化」仮説と並び、「命題1」のもうひとつの仮説である「移民」仮説については、フィッシャーの調査研究の中では「臨界量」仮説の検証と一体化している。このように判断可能な理由は、調査研究に先行して76年に初版が出版された『都市的体験』、ならびに84年に調査研究の結果を受けて加筆・修正が図られた『都市的体験 第二版』における、下記の「臨界量」の具体的な説明において確認される。

たとえば、1,000人に1人がモダン・ダンスに情熱的な興味を持つと仮定しよう。人口5,000人の小さな町では平均して5人、この種の人がいることを意味するが、これはせいぜいダンスについて話し込むのに十分な数である。しかし1,000,000人の都市では、1,000人となる——これはいくつかの練習スタジオ、時々のバレエの公演、地元の会場、そしてある独特の社会環境を支えるために十分な数である。彼らの活動はおそらく、最初の1,000人以上のさらなる人びとを下位文化に引き寄せるだろう（ダンスを愛好するあの5人組も小さな町から移住する）。〈…この強化過程はダンスの熱烈な愛好者のような小さい下位文化、あるいはこれからの下位文化にとって、最大の違いをもたらす傾向がある。都市集中はたとえばハリウッド映画ファンのように、相対的にどこにでもありふれている人びとにとっては、さほどの違いをもたらさないだろう。〉〔筆者注：〈 〉で示した部分は『都市的体験 初版』（Fischer 1976）では省略されている〕（Fischer 1984=1996: 57-8）

モダン・ダンスを例とする（モダン・ダンスとバレエの混同は細事の疑義であるので不問としてお

く) 上記のフィッシャーの説明が、75 年以来抱えていた理論上の難点を鮮明にしている点は、アーバニズムの一般理論として考えた場合、決して看過することはできない。その難点とは、都市度という独立変数からは直接、移民（もしくは選択的移住）という変数を導き出すことができないという問題である（松本 1992）。

パークの古典的論文である「都市」(Park 1915) の論理構成に端的に現れているように、移民に象徴される都市への人口の流入は、都市の人口規模の効果それ自体というよりも、むしろ交通と通信手段の発達の結果であり、従って独立変数として据えられるべきは、都市ではなくテクノロジーである (Park 1915: 607-10)。仮に都市度の効果、すなわちアーバニズムの効果として選択的移住（もしくは移民）を据えたとすれば、フィッシャーのモダン・ダンスの説明の通り、「臨界量」の達成が制度の成立を可能とし、それが目に見えるメディアとなって新しい参集者を惹きつける効果として理論に組み込む以外に、整合性を持たせる方法はない。つまり、モダン・ダンスのフィッシャーの説明は、移民の組み込みに混乱をきたしていることを自ら吐露していることと同じである。従って、縮小化された下位文化理論をさらに整理し直すと①臨界量⇒②選択的移住⇒③集団の摩擦ということになり、フィッシャー自身の「臨界量」の説明に依拠すると①臨界量⇒②集団の摩擦、これのみということになるだろう。

[文献]

- Cohen, Albert K., 1966, *Deviance and Control*, Prentice-Hall. (= 1968, 細井洋子訳『逸脱と統制』至誠堂.)
- Fischer, Claude S., 1972, "Urbanism as a Way of Life: A Review and an Agenda," *Sociological Methods and Research*, 1: 187-242.
- , 1975, "Toward a Subcultural Theory of Urbanism," *American Journal of Sociology*, 80: 1319-41. (= 2012, 広田康生訳「アーバニズムの下位文化理論に向かって」森岡清志編『都市空間と都市コミュニティ』日本評論社, 127-64.)
- , 1976, *The Urban Experience*, 1st. ed., New York: Harcourt Brace & Jovanovich.
- , 1982, *To Dwell among Friends: Personal Networks in Town and City*, University of Chicago Press. (= 2002, 松本康・前田尚子訳『友人のあいだで暮らす——北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク』未来社.)
- , 1984, *The Urban Experience*, 2nd. ed., New York: Harcourt Brace & Jovanovich. (= 1996, 松本康・前田尚子訳『都市的体験』未来社.)
- , 1995, "20th-Year Assessment of the Subcultural Theory of Urbanism," *American Journal of Sociology*, 101: 543-77.
- Fischer, Claude S. et al., 1977, *Networks and Places: Social Relations in the Urban Setting*, Free Press.
- Gans, Herbert J., 1982, *The Urban Villagers: Group and Class in the Life of Italian-Americans*, Updated and Expanded edition, Free Press. (= 2006, 松本康訳, 『都市の村人たち——イタリア系アメリカ人の階級文化と都市再開発』ハーベスト社.)
- Keyes, Fenton, 1958, "The Correlation of Social Phenomena with Community Size," *Social Forces*, 36: 311-15.
- 松本康, 1991, 「都市文化——なぜ都市はつねに〈新しい〉のか」吉田民人編『社会学の理論でとく現

- 代のしくみ』新曜社, 173-90.
- , 1992, 「都市はなにを生みだすか——アーバニズム論の革新」森岡清志・松本康編『都市社会学のフロンティア 2 生活・関係・文化』日本評論社, 33-68.
- , 1996, 「訳者解説 クロード・S・フィッシャーの『アーバニズムの下位文化理論』について」クロード・S・フィッシャー, 松本康・前田尚子訳『都市的体験』未来社, 405-26.
- , 2002a, 「社会的ネットワークと下位文化」高橋勇悦監修, 菊池美代志・江上渉編『21 世紀の都市社会学』学文社, 41-53.
- , 2002b, 「アーバニズムの構造化理論に向かって」『日本都市社会学会年報』20: 63-80.
- , 2005, 「都市度と友人関係——大都市におけるネットワークの構造化」『社会学評論』56(1): 147-64.
- , 2008, 「サブカルチャーの視点——C. S. フィッシャー『アーバニズムの下位文化理論に向かって』(1975)」井上俊・伊藤公雄編『都市的世界』世界思想社, 53-62.
- 松本康編著, 2004, 『東京で暮らす——都市社会構造と社会意識』東京都立大学出版会.
- 松本康編, 1995, 『増殖するネットワーク』勁草書房.
- 森岡清志編, 2000, 『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会.
- 森岡清志編著, 2002, 『パーソナルネットワークの構造と変容』東京都立大学出版会.
- 大谷信介, 1995, 『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク——北米都市理論の日本的解説』ミネルヴァ書房.
- , 2007, 『〈都市的なもの〉の社会学』ミネルヴァ書房.
- Park, Robert E., 1915, "The City: Suggestions for the Investigation of Human Behavior in the City Environment," *American Journal of Sociology*, 20: 577-612.
- 佐藤郁哉, 1999, 『現代演劇のフィールドワーク——芸術生産の文化社会学』東京大学出版会.
- 佐藤郁哉・佐々木克己, 1996, 「演劇ブームと都市文化の社会的生産」吉見俊哉編『岩波講座現代社会学 18 都市と都市化の社会学』岩波書店, 91-111.
- 鈴木広, 1973, 「比較都市類型論——発想の系譜を中心に」倉沢進編『社会学講座 5 都市社会学』9-46.
- Wellman, Barry, 1979, "The Community Question: The Intimate Networks of East Yorkers," *American Journal of Sociology*, 84: 1201-31. (= 2006, 野沢慎司・立山徳子訳「コミュニティ問題——イースト・ヨーク住民の親密なネットワーク」野沢慎司編・監訳『リーディングス ネットワーク論』勁草書房, 159-200.)
- Wirth, Louis, 1938, "Urbanism as a Way of Life," *American Journal of Sociology*, 44: 1-24. (= 2011, 松本康訳「生活様式としてのアーバニズム」松本康訳『近代アーバニズム』日本評論社, 89-115.)

Reconsidering the Subcultural Theory of Urbanism: Toward Verification by Ethnographic Studies

TAMURA, Kimihito

In this paper, I examine the extent to which Fischer's empirical research (Fischer 1982) confirms his "subcultural theory of urbanism" (Fischer 1975). This theory includes four main propositions. Proposition 1: *The more urban a place, the greater its subcultural variety*. Proposition 2: *The more urban a place, the more intense its subcultures*. Proposition 3: *The more urban a place, the more numerous the sources of diffusion and the greater the diffusion into a subculture*. Proposition 4: *The more urban a place, the higher the rates of unconventionality*. His network-analysis-based research was characterized by major flaws and was able to test only Proposition 1. I suggest that appropriate ethnographic studies, rather than network analyses, are necessary to validate this theory.

Keywords: Fischer's subcultural theory, network analysis, ethnographic studies